

日朝共通基語音韻体系比定のための二三の仮説

『長田夏樹論述集（下）』第13章
(原載：『言語研究』第37号, 1960年3月)

日本語と朝鮮語はアルタイ語族における第四の語派を作る言語であるとの仮説のもとにこの語派の基語の音韻体系を比定・再構する論文である。

朝鮮語の母音体系「強 a o u e, 弱 ə u u, 中 i」の「強 e, o」の音価をそれぞれ /o/, /u/ と「比定」する。一方で上古日本語のそれを短母音「強 a o, 弱 ö, 中 u i e」、長母音「強 ě ĭ」とする(ö ě ĭは乙類)。ě > ai, ĭ > ui, öi であるため朝鮮語との対比では、ä u ö とするとして「日鮮(ママ)共通基語」の母音体系を次のように再構する。

強	a	o	u	(i)
弱	ä	ö	ü	(i)
中	i			

(i) は一方で u、一方では弱母音 (i) へと、弱母音 (i) は中母音 i へと推移するとされる。

子音体系については激音と濃音の来源が説かれる。激音については「去声」の発生という超分節音素の発生が併せて論じられる。濃音については語頭複子音からの変化が説明されている。結果として朝鮮語の子音体系は次のように再構される。

k	p	f*	t	č	s	h
		v*		ž*		
ŋ	m		n		r	y

f* はほとんど語頭に立たず、v*, ž* は語中以降に現れる。ž* は音韻的な意味で č に対応する濁音ではないとされる。

具体的な語例が全く出ていないためこれだけからは知りえないが、この論文はその後の「主意型」説への基盤となったものと考えられる。(伊藤英人)